

平成16年度第2回「鳥取市政懇話会」産業振興部会

会 議 要 旨

日時：平成17年2月25日（金）

午後2時05分～4時10分

場所：鳥取市役所4-3会議室

第3応接室

出席者 【委員】清水昭允、太田義教、安養寺幸男、宇津原恵美、大木戸武敏、川上一郎、
四宮昭彦、浜田あけみ、水根富士雄、山本朝子
【鳥取市】山下農林水産部長、浜橋産業振興課長、勝井産業振興課課長補佐
企画調整課 山川、井上

1. 開 会
2. 部会長あいさつ

皆さんにフリーディスカッションでいろんな意見をどんどん出してもらって、事務局の方で整理していただく。ある程度いったところで今度、2カ所に分かれて、商工の方と農林業の方に分かれて、今度はちょっと専門的な意見を出していただく進行とする。

地方税が久しぶりに増益になったが、中央から回ってくる金が少なくなり、緊縮財政というものに移ってきているのが現状。そういう現象が起き出してから市町村合併ということで整理統合が今始まって、みんなが知恵を出さないといけない、発想を変えていかないといけない。考え方、動き方も今の時代に、時流に合ったようなものにならないといけない。

農業にしても漁業にしても林業にしても、それから商業、工業、それぞれ企業家としていろんな事業をやり、税金として様々な形でそこに回って入ってきたものを、また市民の方がいろいろ使うというようなことで循環している。

今3次産業の方がずっとふえてきている。これから業を起こす人間がもっと盛んになっていくというのが、都市がにぎやかになる、たくましくなる一つのもとになる。雇用の場にしても、付加価値をつけるにしても、業を起こしている者がそういうことで税金を納め家庭を持ち、そこで消費の商業の方に回っていくというように、物づくりの方と消費の方とのバランスで好循環になればにぎやかな明るいまちになってくるのではないかな。

最近、教育委員会とタイアップし、小学生から起業家の教育というものがはやっている。また、小学校、中学校で専門家が実験装置を学校に持って実験をやり、生徒に刺激を与え、物づくり、物を考えるきっかけをつくるという教育もある。

昭和42年に三洋電機が出られてから、ノウハウを持った人、いわゆる技能技術を

持った方が今、定年でやめている。そういう方のノウハウというのをやっぱりもっと
伝承するということが必要であり、何かの形で若い人に伝承するということができな
いか。

三洋電機は、鳥取の雇用と税収入に貢献してきたが、技術、ノウハウは三洋電機自
身が持っており、それを有効に今後使うような手だてもできないか。

ふだん思っていること、考えていることを皆さんから発言していただき、事務局に
みんなの意見を上手に吸い上げてもらって、鳥取市の産業がにぎやかになって、明る
くなるような手だてというものを8次総の中に入れてもらい実現するような形をとっ
ていただいたらいいのではと思う。

3. 議事（概要）

【全 体】

- 委員 7次総、100人委員会、合併までの各町村の総合計画など、いただいた資料を
一読させて必要不可欠な項目ばかりだが、それらを具体化するのに必要な人、物、金
があるのだろうかというような危惧が先立った。
- 委員 8市町村が合併して相当数、権限を支所長に与えるというのを聞いていたが、足
湯のポンプの修理に約2カ月かかった。行政の早い対応が望まれる。
- 委員 自立した自治体ということがこれからの方針として上がっているが、財政とか事
業の規模とかやり方が身の丈に合ったものか。行政はちょっとやり過ぎ、市民は求め
過ぎ。市債という形で、企業でいうと借金を背負ってまでやれるような状況なのか感
覚のずれを感じる。ある程度事業の主体というのを絞っていかないと、末代に非常に
借金を背負わせてしまうということになる。
- 委員 農林分野では今までは補助金づくめ、国策に乗った部分というのがかなり多
かったが、既にWTOの問題一つをとっても、そういう政策論だけの問題ではなくて、
意識改革の問題に入ってきている。一番力を入れなければならないのは、トレーサビ
リティ、消費者が選べるような環境づくりや仕組みに持っていくこと。市民の意識改
革というものに対して、自治体がどこまで役割機能を果たしているか。
- 委員 基本的には1次総であるべきではないか。新しい鳥取市の特性は何かというこ
とをきちっとみんなでとらえるということが必要。田舎がふえて弱点が増えたと感じて
も弱点を補うにはお金がかかる。むしろ、新しく生まれた鳥取市の売り物、強み、資
源は何か確認し合って、その資源をいかにうまくつなぎ合わせて付加価値をつけて売
り出すことなどが次の市の施策の中に盛り込まれていくべき。田舎の売り出し作戦と
いうのを本当に考えてみるべきではないか。鳥取の田舎らしいところをうまく売り出
す田舎暮らし推進課というような組織でもでき、それに知恵を絞るということも産業
振興の一つの方向である。
- 委員 定年後の人材活用。都会から鳥取に帰ってきたい人ってどんな夢を持っているの

か。もうけとしない農業、農業をしてももうけを目的としない人がこれからふえることを前提にして、活性化のことを考えていくべき。市の森林面積は7割。それを子供たちに開放できないか。資源回収に市が補助金出すかわりに古紙を何トン集めたらこの1平方メートルの森林を学校にあげるといような。いろいろな活用の仕方が見えてくるかも。

○委員 7次までの実績、効果、それを中心にできなかったものは残していつて継続していく。その上で新しいものを載せるという将来5年、10年先のものにした1次総にしてほしい。また、周辺の岩美、若桜、智頭とかも入れた将来的な連携をとるような施策をこの中に投入していただくようなこともお願いしたい。

○委員 お客さんの望むもの一般の消費者の方が何を考えてどういうものを望んでいるのかということか商売では大切だが、消費者の望むものと自分の望むものと視点が違う場合がある。今は消費者のニーズに合わせたものがはやっているが、スローフーズという観点も一から考えていただきたい。世の中を変えていくためには、今までの行政の既成概念を変えていかなければいけないときが来ているのではないか。

○委員 第1次産業は環境の非常に厳しい中にあらゆるものに困っているが、悲観論や後ろ向きなことばかり考えてしまうことを払拭しなければならない。一步広げて大きい目で見ると、このたびの合併は大変恵まれている。もっと行政などに積極性が欲しい。知恵出せば何とかするではなくという姿勢ではなく、本当のリーダーとなり率先して地域をどうするかを示すべき。合併は、観光とか地場産業の育成、財政という面ではチャンス。農業、水産業、林業というのは、これは環境産業の起爆剤になる。そういうことを結びつけるリーダーをどうやって育成するか。地産地消というが、いい野菜も消費者から選ばれる時代。今まで市場に出していた生産者がみんな脱落し市場にものはまとまって入らなくなる。産地を育成し機能的に結びつけるいい知恵を出さなければならない。

【商 工】

○委員 体育ゾーンとか文化ゾーンとか市全体としてゾーンづくりができるか。まちづくりはゾーン化・集中化というのが大事。例えば郷土芸能館を若桜街道の中央の若桜橋の付近に設置する。鳥取市には因幡傘踊り、浜村の貝がら節踊り、麒麟獅子、皿回し、佐治谷話などもあるし、そういうのを観光客、市民に毎日何かを見せれば活性化に繋がる。その隣には観光物産館のようなものがあり、駐車場も設置する。それを観光協会とか旅館、ホテル、連携しながらやってみてはどうか。

若桜橋の付近の郵便局跡を土手を活用して、催しのときには棧敷席を仮設で組み立てていく。あそこで夏場は特に大型テレビを置いて、それでプロ野球を見せたり、9時ごろまでは子供向け、それから将棋、囲碁とか、人が集まれば幾らでも市民も活性化になる。朝市のようなものもその付近でしてみるとか、いろいろ総合的なものの施

設があれば活性化するのではないか。

- 委員 6時半、7時ごろになると若桜街道はシャッターがおりてしまって寂しい。歩いている人はほとんどいない。空き店舗を市があっせんして、若者が小さなおもしろい雑貨物を置いたりして商売をやり始めているが続いていかない。若者は京阪神に出て物を買う。この鳥取を何とかしなければいけない、外に出ていく人を食いとめなければいけないという店主が少ないのでは。

女性グループでリサイクルショップをやり始めたが、権利金や家賃とか田舎であるのにもかかわらず、結構高い。最初のやり始めた3年間ぐらいを、いろんな意味で行政が援助すれば、おもしろいまちづくりができるのではないか。買うことが目的でなくても市中にいろいろなおもしろい店ができれば、観光的なリピーターも増える。若者の出店を増やしていくのは市民をはじめ行政のバックアップが必要。

- 委員 行政職員がもっと金を使ってほしい。タクシーや飲み屋に行くと非常にがらがらになっている。地方に行けば行くほど最大の消費の力を持っているのは行政職員。県も市も地元金に金を落とすようなことを考え、また行動するべき。消費行動も変わり、日常の店舗の問題もあるが、一たん人の流れを呼び戻すためには、本当に相当なエネルギーが要る。

アメリカに行くと百貨店からスーパーから専門店からモールで1カ所に行けば全部用は足せる。ヨーロッパでは市役所の駐車場は地下に最初からある。城をつくるのもそうだが、そういうインフラなんかについては継ぎ足し行政ではなく30年とか50年ぐらいを考え、継続性のあるものはやっぱり市長がかかわろうと、知事がかかわろうと、それが継続するような形に持っていかなければいけない。

また、変電所、東部のごみ焼却場などの迷惑施設の問題などについて、県と市との役割はどういうような形になっていくのか、行政というものの役割、責任というのが見えてこない。産官学連携も企業誘致もばらばらでやってもとても無理。企業誘致は非常に金がかかるので、今ある企業をもっともっと大事に育てる。それが地産地消。そういった面でやっぱり物質的なものだけではなくて、いろんな面での支援が必要。学生の就職についても、今は非正規社員か、海外へ労働力を求める。地元に残れ残れと言ったって、働き口がないのになかなか残れない。教育行政も考え方の整理を。

- 委員 例えば浜村温泉の場合、貝がら節祭り、気多の市などは絶対になくしてはいけないと地元も言っているが町職員は半減した。市の方からも職員がボランティアでいってやれみたいなことを発していただければ。今は地域の公民館が主体になってきている。人員も少なく、報酬も少ないので運営について市に検討願う。

- 委員 郊外大型店の相次ぐ進出で田舎部分の小売店や中心市街地はゴーストタウン化が進んでいる。薄汚れたシャッターがおりたまま、ほこりだらけのウインドー、陳列ケース、創意工夫も販売員の姿もない、投げやりな店が散見される。以前の計画では、

市民、商業者、TMOなどと行政が連携するすばらしい事業計画が具体的に記載されているが、幾らその項目がよくても、要はこれをリードして対応する行政の実務組織と専任者の技能、予算規模などが具体的にいかがなものか。本当に事業計画を推進できる体制にあるのか、また行政のスタッフがお役人的でなく、そのために、事業推進のために、具体的な推進のために鬼になれるような、熱意と行動力のある人の配置、配属が本当に必要不可欠ではないだろうか。熱意と行動力のある外注応募で人を集めていただき配置していただきたい。

中心商店街の活性化には、良質な駐車場の設備が避けて通れない。良質な駐車場を新增設をすべき。100人委員会でも、駅前の合銀さんの駐車場の観光バスの駐車を提言されていたが、これは進展をしているか。観光都市というのは大体駅前に大型観光バスが駐車できるスペースがあるのが普通だが、これが必要ではないだろうか。何時間も観光客をおろして市内を散策させたり、あるいはその駅前が起点であるということが定着すれば、市街地も潤い、タクシー業者もレンタサイクルも利用、それで活性化できるのではないか。また、客と店が信頼関係を持ち、触れ合いのできる店を復活させることもまちづくりの一つではないか。

○委員 8次総で新しい市になったら、広範囲な中から人材づくりというか、人づくりが必要。人をこしらえるためには農林漁にしろ、商業工業にしろ、そういうものが好きになるような人づくりが大切。プロの、ベテランのノウハウ、技能を持った方がいっぱいいる。そういう経験話なんかもしていただき、若い者と一緒に実験の場というか作業場みたいなところで、物づくりの手法を学ぶというのも一つ。

また、理科をちょっとプロ級にしたような内容の実験みたいなものを、実際に教室の中とかでやってみてもら。子供が関心を持つような、興味を持つような仕組みというのを社会がこしらえてやったら、子供というのはそっちの方に引かれていくのではないか。民間の企業とそれからまた教育委員会とがタイアップした人材づくりというのを一つは欲しい。起業、創業の初期投資について創業支援融資とかがそこに必要になってくる。

市で、物づくりの中で商品化されたものに対して150万ぐらい出していただいているのはありがたい。1回受けたらなかなか番が来ないが、ある程度予算でも組んでもらえば、結構チャレンジする気持ちがわく。その中に入っていないのが、新製品をこしらえる場合。今ある制度は、ある程度商品ができて、一つの目安としてもうこれをマーケティングするようなものに対しての融資ということになるが、その手前にそういう試作品の、新しい製品ができるまでのやっぱり支援施策なんかは欲しい。これから鳥取で新しいものをこしらえる、新しい店をこしらえる、それでそこに雇用が発生して空き店舗がなくなる、それから工業団地ももう一回活気がついてくるというようなまちづくりというものがこれから必要になってくる。

退職された方で結構ノウハウを持った方というのはたくさんおられ、そういう人に

若い、初期投資をこれからしようかというような人に経験話というか、そんなのもやってみようような場というか、機会をこしらえてもらったらいいいし、会議所とタイアップしてもらったら、会議所の方の中小企業支援センターというのがありますので、そっちの方なんかでも結構取り組めるなというような感じがします。もっと鳥取の若い者に興味を持たせたい。

行政は、商工のプロというのがあまりいない。商工業は地域に貢献しているので、市の行政の体制としても、そういう専門職の人を張りつけてもらって、もっとやっぱり業を起こしている者の今の苦しみとか悩みとかなんかを酌み取ってもらって、いろいろアドバイスとか援助とかいわゆるコーディネートしてもらおうとかというようなことをしてほしい。アドバイザーの時代ではなく、コーディネートの時代になってきていると思う。

姫路とか岡山などとも高速道路開通を契機にもっと交流をしないといけない。交流による新たな仕事の可能性もできるので、商工会議所でも今、交流を大切にしようやっている。町村と鳥取の者との間でももっと交流すればいい。出会いの場というものをもっと積極的に何らかの形で出してもらったら助かる。

- 委員 郷土芸能に限らずそういう館があって、すぐ隣には物産館があってとか、その関連があって、こっちは将棋して遊んだり、高校生がキャーキャーとテレビとか、そういう、9時ごろまででないともた青少年育成のこともあるから。そういうようなゾーンをつくってやっていただいたらありがたい。
- 委員 いわゆるゾーンづくりと一番初めに言ったとおり。文化ゾーンとか産業ゾーンとかいろいろあると思う。それはもう都市ができていますから無理だが。
- 委員 ゾーンづくりはされる。大抵この7次総なんかでも一番最後の方に、ここは教育ゾーンとか環境ゾーンとか工業ゾーンとかある。
- 委員 駐車場も踏まえた総合的な計画に。これからは必ず姫鳥線が来れば、絶対観光客がふえる。そのためには滞在型を考えなければいけない。そういう意味で言っているし、それに対してまた観光案内のボランティア活動、小さく人材育成の中の一環ですけど、そういうことや、タクシー会社から駅の駅員からの面接というか、応接の仕方とか、ホテルの従業員の仕方、そういうところの養成から何からすべて総合力のあることをお願いしたい。
- 浜橋産業振興課長 起業に対する初めのうちの補助をという話があったが、今ある制度では、御存じのようにチャレンジショップというのが、今、市内で3カ所あり、1年間の限定版ですでにやっている。それからにぎわいのある商店街づくり事業で、空き店舗を活用して起業をされる方に対する空き店舗の改装費だとか、家賃の補助だとかというのはやっている。それからまちの起業家育成ということで、起業をされる方に初年度には 300万円まで、2年度目には200万円まで助成をするという助成制度もある。これは14、15、16の3カ年間のいわゆるサンセット事業というこ

とで始めており、16年度で一応3年間終わるのですが、16年度に新規に立ち上げられた方、5人の方が、5人ずつ融資しているが新規に16年度に立ち上げられた5人の方が、まだ17年度に2年目の分が残りますので、一応17年度予算には5人さんの200万円、1,000万円分がついている。

○委員 それはどこが窓口をしているのか。

○浜橋産業振興課長 市が中央会に委託をして、中小企業団体中央会でやっている。17年度予算についてはもう新規分はなし。

○委員 もうストップしたのか。

○浜橋産業振興課長 ストップした。それは3年間のサンセット事業だということで、商工の方としては同じもので、皆さんに人気もあるからやりたいということで予算要求したが、同じものではだめだと。もっと考えて起業家育成、また変わったスタイルで考えてみなさいというようなこともあったので、またこの8次総なんかにもそういう位置づけをして、18年度にまた新たなもっと変わっていい起業家支援ということで持っていきたいなということで思っている。

○委員 そういうニーズがあるから、要望はどんどん出そう。

○委員 日本全国が観光客について競争しても鳥取はやっぱり弱い。むしろ県内の人たちが自分たちの町で楽しむというか、何も県外の人たちに来てもらってというよりも、本当に県内の、市内の人が楽しみにくるスタンスの方が良いのでは。みんな時間は昔よりあると思う。私たちが物を買うに行くというのは、必要に迫られて買いに行くというのは食べることぐらい。しかも食べることもどっちかといったら、家の中の冷蔵庫あければ1週間分ぐらい食べるものはあるぐらいの生活になっている。着るものから調度品からいろんなものが。何かしら楽しんで買っているように思う。もっともっと私たちは本当に大切なものは何なのかというのもわかってきたら違ってできると思う。

○浜橋産業振興課長 産業廃棄物について県としての役割はどうかということだが、産業廃棄物の処理については県が責任としてはあり、市町村については一般廃棄物についてありますというすみわけができており、県が音頭を取って産業廃棄物の処分場の話とか何かを進めているというのはあるようだ。

○委員 センターの副委員長をやっている。今は岩美の町長が当事者になるが、みんな逃げている。何か行政もみんな逃げちゃっている感じでどうなっているのかと思う。

○委員 変電所だって、市が一生懸命誘致してもこの町内、あそこの町内、何で市がこんなことを言っているだとか、精神問題というのがある。それは行政としてはできない。

○委員 貝がら節祭りなどは支所の職員が減って人が足りない、応援をみたいな話があったがそのことは気高だけの話ではなくて、ほかの支所でもある。

○委員 各町村今言われたことは出てくるから、やっぱり対応の仕方を考えるべき。

- 浜橋産業振興課長 今、観光コンベンション推進課の方が何かいろいろ検討といいますか、例えば経済観光部の職員がそれぞれのときに応援に出ていくのがいいのか、それとも例えば近くの支所の職員さんを行っていただくようにするのがいいのかとって、その検討をしているというふうに聞いている。
- 委員 一番初めに言われた、足湯のポンプ修理などは対応は結局どこに行くのか。
- 浜橋産業振興課長 支所に言ってもらえばいい。合併が16年度の途中からだということがあり、いわゆる予算の執行権の問題、財務会計とのやりとりの関係などお互いが試行錯誤していたところがあった。それで本庁の方の本課から支所の方にこういう予算があるので執行する、しないの意思疎通ができてなかったということがあったようだ。
- 委員 権限があるのに何でポンプごときに何カ月もかかるのか。
- 浜橋産業振興課長 そういう話はあったように聞いている。それぞれ今まで16年度予算というのは役場で予算化していたのを、鳥取市の予算と一緒にして、それからまた支所に分けるというような作業をやったものだから、それでお互いに行き違いがあったように聞いている。今は大分スムーズにいつている。17年度は新しい予算になり、今後は支所長の権限でできる範囲はすぐに対応できると思う。
- 委員 旧市から派遣されている副支所長がいる。そういう方がすべてそこらをうまく説明していただけると。
- 浜橋産業振興課長 支所長さんはなかなか旧庶務課長か総務課長かわからないけど、副支所長さんはそこらをうまく納得のいくような、話をしてくれると思う。
- 委員 合銀の駐車場の話はどうなったか。
- 浜橋産業振興課長 都市建設課というか、都市整備部の方がやっているようです。現在の状況は聞いていません。
- 委員 全然動きがないみたいだから、せっかくいいことが書いてあるのにと。また後からでも、次回でもね。
- 浜橋産業振興課長 後で調べてお返事する。
- 委員 接待交際費というものが相当削られている関係で、お客さん物すごく減った。本当に寂しい。
- 浜橋産業振興課長 もう今、基本的に公費で飲食を伴う会というのはできなくなった。
- 委員 旧町村の役場の所在地のあたりの飲み屋さんが大変。議会がなくなる、なにがなくなるで。
- 委員 議員さんが何十人いて、それがあれすると役場との懇親会があるとか、そういうのがゼロ。大変のようだ。それから飲み屋街が40年代よりどっと減ったというのは、一つは給振がある。前は給料を全部亭主が持って帰っていた。それと、それからもう一つは、県庁が規制された。
- 委員 若桜街道がどんどん寂れたのは、路上駐車できなくなったからという人もいる。

【農 林】

○委員 全体での発言。トレーサビリティの話があった。素材として選べる、消費者の方が素材がいいものかどうか選べる環境づくりというものが需要ではないだろうか。それを通じて食べる教育というのがあるべきだというようなこと。

田舎暮らしというのは今やマイナスイメージではない。それを鳥取の一つの資源としてうまく使って、都会から帰ってこられる人の受け皿の一つとして、田舎暮らしの推進をしてはどうか。

森の面積が広がったということで、その森の有効な活用の仕方、子供たちに森をうまく使ってもらう方法を考えることができないだろうかというようなことがあった。またそこから掘り下げていただいたら。

○委員 田舎暮らし推進というのは、単なる、それだけにとどまらずいろんな波及効果を生むのではないか。要するに外に向かって売り込むということ。それで、一つ番組をつくった、最近番組で放送した島根県の例だが、島根県の田舎の売り出し例。これは島根県の石見部、島根県の西部の桜江町というところ。そこに東京から6年前に1人の女性がIターンして帰ってきた。その人以外にもIターンで帰ってきた人が何人かいて、そういう人が軸になって田舎売り出し作戦のキーマンに。キーワードはIターンをした人とそれからインターネット。具体的には、行政のサポートもあったが、田舎暮らし体験ツアーをしませんかというのをインターネットで呼びかけたところ随分たくさん応募があって、今現在も体験ツアーを実施している。2泊3日、1人1万円ということで、大体バス1台、20人ぐらいの人が何回かに分けて現在も来ている。

中には田舎生活にあこがれてIターンした女性が、自分が呼びかけた人間が乗るバスに乗って、バスガイド役をしつつ、その土地の魅力をIターンした立場の自分の目で見て紹介しつつ、体験ツアーに応募してきた人を案内している。中にはその日のうちにぜひ住みたいと決心をして空き家を探し、そして次のときにはもうそこに住むことになったというようなこともあったそうだが、そういうふうなことで、桜江町は人口3,400人の町だったのですけど、5年間でプラス70世帯、200人ふえたらしい。これは非常に象徴的な例かもしれないが、今、インターネットを開いてみて田舎暮らしで検索したら、すごいいろんなデータが出てくる。全国各地、特に東北、北陸、信州も熱心。

山陰地方というのはまだまだそこまで売り込みが図れてない。ただ、桜江町に比べれば少なくとも関西マーケットを向いたときには鳥取というのはいいポジションにあるわけだし、これから道路も開通も控えているわけですし、アクセスの面からも桜江町には少なくとも負けないだろう。やっぱりそういう、まず田舎暮らしのきっかけになるのは、ふるさとに帰ってくる、田舎暮らし、やっぱり田舎がいいといって帰ってきた人たちがキーマンになり、Iターンした人間が呼びかけるというか、これはやっぱり新しい鳥取市のあり方の一つのヒントになるのではないだろうか。そこにいろ

んな魅力をつけ加える必要もある。

例えば県は割とサポートしている古民家の再生というのがある。田舎でもう住み手がなくなっている古い民家、それにちょっと行政がサポートして古民家を再生しようというようなものもある。幸いに鳥取市には環境大学があり古民家再生とかそういう田舎の生活空間とかというものに対するデザインというか、専門家もいるわけで、そういうもので付加価値をつけることも可能だし、それから鳥取市というのは民芸文具が豊富。例えば河原町には何メートル間隔で窯があつたりとか、いろんな紙すきのがあつて、そういう民芸というか、そういうこともキーワードにはなる。そういうもので付加価値をつけて因幡を売り出すというようなことも一つは具体的に取られることにはならないだろうか。

- 委員 Iターンで帰ってこられた方々というのは、それは定年になってからですか。生活のことがちょっと気になるもので。どういった方か。
- 委員 その中心になってやっている人は若くして割と帰ってこられた、40代とか。実際その女性は40代。けども、今度、そういう人たちが中心になって呼びかけるのは、リタイアしたらふるさとに帰っていらっしゃいと、年金暮らし十分できるよということなので。それが2007年にとりあえず大量の定年を迎えるという状況なわけですよ。
- 委員 定年の方が多いのか。
- 委員 多い。これから団塊の世代が。
- 委員 退職金を払ったら会社がつぶれるみたいなのがいっぱいある。都会者が考える田舎というのデザインして売る。絶対あの人たちは田舎はいいなと思っているが、本当の田舎って見ていない。虫がいたりとか蚊が刺したりとか、そんなところは隠しておいて。どんな夢を持っているのかというのをまずリサーチ、マーケティングをして、やっぱりリタイアしたら田舎でゆったりしながら、夜は近所の仲のいい人たちと集まって楽器を弾いて歌を歌ってみたいなことを絶対考えてる。そういう集まりができるようなところをとっておいて、古民家みたいな雰囲気のをぼっぽと置いて、ここで家庭菜園もあるよとか、食いつく。
- 委員 結局、やっぱり地域の人たちとのかかわり合いというか、それも一つの売りになる。煩わしいと思う人もいるかもしれないが、例えば、うちが取り上げた番組の中では、石見神楽と一緒に例えば習ってみるとか、夜はその土地の料理の講習会があつて漬物を習ったりとか、土地の老人から。という地域のネットワークの張り方というか、それに魅力のある要素をちょっと探し出してそれを売り込んでいくという作業。
- 委員 マーケティング。本物の農業のことは全然わかりませんが。
- 委員 実際の農村地帯の今の現状の農家の受け皿として頑張れるかどうかというのはどんな感じなのか。
- 委員 今の農家を受け皿にとか考えない方がいい。

○委員 ただ、地域としてはやっぱり農村地帯は今の農家、今の農業集落が基礎基本にならないといけないので。

○委員 例えば河原のあの辺のあいている家にぽっとやってきて、なじんでやっていけるかというような問題。

○委員 なじむというよりは、その土地の人はどういうふうにそういうのを、今の現状ではどう思われているかなというのが？

○委員 グリーンツーリズムだとかいろんな形を展開したり、夢を描いたりして、中には成功に近いものも、全国的にはたくさんある。しかしそれは全部どこでもということになるかならないかという問題が一つ。

産業として考える場合は、生産という分野が当然あり、その生産という分野と消費というものをどう結びつけるかということ。とかく今までは物売りの生産の考え方で、金もうけだけが優先したため、ぐるぐる回って市場から流通経路をたどって消費者に、どこのだれのものかわからなくても、とにかく食べ物として供給していたという役割機能だった。それが今問われてきたのは、安心安全も含めて確かなものでなくてはならない。そこでやっぱり田舎の特色をきちんと明確にしなければならない。

消費者が何を求めているのか、食農、食と農の結びつきの問題であり、まさしくそこに意識改革を起こさない限り成功しない。全体的に役所の一つの働きかけとしては、点だけを育成せず点と点とは結び波及効果をねらわなければいけない。

食と農という部分の中で、次の段階で起きるのは、家庭の問題が大きくネックにある。家庭というのは、夜になってから寄り集まるところだけであって、意思疎通もあまりない。田舎の分野というのが、家庭から崩れているというふうに思う。この家庭の中に食と農というものをどう結びつけるかということで、今PRしているのは、食育型家庭菜園、食育型市民農園というもの。食育型市民農園というのは、目的が、ただ買うよりも安いからいいとか、そういうようなものの市民農園ではなく、食育型という、食というものの中に含まれる意識改革も含めて農地どう提供するかということ。今までは市民農園法で難しくされていたが、今度は直接に結びつける方法も道があいてきたから、そういうものを進められるような仕組みに持っていく。どこでもだれでもが好きなだけ農地を持って入っていくと、こういうところから渦を展開していくというのも大事な分野ではないか。そこには整備も必要な部分もあるが仕組みを上手に持っていき、PRもすれば、今のふれあい市と同じように、動きが本当に元気が見えてくるのではないかなと思う。身近なもので、みんなだれでも参画できる。

○委員 減反の話があったが、耕作しなくなった田んぼとか畑はどういうことになるのか。あれは作物をつくらなくなったら荒れ放題か。

○委員 だから今、不耕作地。耕作しない、これがだんだんふえている。

○委員 もったいない話。

○委員 非常にもったいない。ところがそれに対して、基本的にこれだという政策はない。

さっき言ったように担い手であるとか、集落営農でやりなさいとか、それで米、結局減反というのは米なのですよ。米のかわりに、休耕田に何をやるかということの、そこがなかなか。

- 委員 米でなければつくっていいわけですか。
- 委員 いいですよ、米つくらなかつたらいいのですから。
- 委員 市民に開放して何か小作料をもらおうというようなことでもいいのですか。
- 委員 もちろん今の市民農園というのはそういう形になっているですよ。
- 委員 だけど小作料というのはもう本当に微々たるものでして、これは物の考え方いろいろありますけど、ソフト面はいろいろ出てくるのですが、ハード面をどういうふうにやるかというところが、実はハード面はなかなかこいつは個人ではできない。ここに根っこを入れて鳥取市はどうやったらこのハード面の、産業の減反のところにビニールハウスを建てて、集団化した何人かで何をつくる、産地にするとか、それから、市民農園の非常に向いているとか、それからいわゆる I ターンのこれのもう集団に非常にいいとか、ここだったら無条件でやるとか、そしてまた観光の一つのグリーンツーリズムとか。実は日本でグリーンツーリズムも盛んに叫ばれて、農林省から何かから言うのですが、なかなかこれが定着しない。ところが、因幡には、素材としてはハード面では環境としては非常にいいぞということを、どのコンサルタントも言う。ところがそれを結びつける、リーダーがないというのが悩み。
- 委員 僕もこの番組の放送が終わって感じたのは、ああ、ふるさとがやっぱり忘れられない、ふるさとが懐かしくて帰ってきた人間というのはエネルギーがあるなど。
- 委員 都会暮らしで改めて田舎の魅力をまた3倍ぐらいになって返ってくる。
- 委員 それが入りやすいような、そういうこと環境整備ができていない。
- 委員 それが都会暮らしをした人間がまたメッセージを都会向けに出すということの意味が、I ターンにそういうキーマンがいると。
- 委員 東郷町に神戸の震災に遭われた方が、自分たちは梅が作りたいたいということで、定年退職してから全国を回って梅を研究され、東郷町にあいているところをお借りになって梅をつくらうということで来られた。そして、神戸の仲間の人たちが私たちも行くという気持ちでおられたのだけでも、環境整備を東郷町はできなかった。環境整備できなかったのは作地。その梅の作地をふやそうと思っても、自分が交渉しないとだめ。JAとか町とかいろいろ絡んでくれればいいがなかなか、表面上は絡んだ格好になっているが、それからその住まいを東郷湖の横に宅地造成した。
- 委員 だけどそういうことは絶対嫌う。
- 委員 だから、そういうことでうまくいかないで失望なさっていましたよ、大変。つまり、そういう環境整備と、それからそういう部分をやるリーダーが……。
- 委員 せっかく意欲があってもつぶしちゃった。
- 委員 結果的につぶれたということです。そんな例はたくさんある。

- 委員 体験ツアーというのがあって、宿泊はどこなのですか。やっぱり……。
- 委員 民泊。2泊3日、1人1万円でしょう。
- 委員 体験ツアーまではいい。ではここによし住んでやろうかと、そのためには行政はどう協力しているか、JAはどう協力している、どうなっているか。それでもしわからなかったらリーダーがいて、実はJAのいなばの職員さん、JAぐらい人材、こういうことの人材を持っているところはない。
- 委員 金融、保険、JA共済、営農、経済、葬式屋もやっている。何でもありでみんなこなす。これぐらい人材があふれているところはない。退職勧奨して、そういうリーダーとして活動させ、最終的に法人化までさせて収入を上げて自分のビジネスとして、そこで稼ぎなさいと。何でこれができないだろうかというような感じがする。そうしたら、物すごいリストラができる。変な意味のリストラではなくて、JAになってくるリストラ。
- 委員 本当に真剣な人は全部JA離れしていく。JA離れした人は、中央青果、協同青果、鳥取花市場、鮮魚市場、鳥取市の絡んでいる鳥取鮮魚市場などがある。
- 委員 中央青果はこれはもう個人のもので、ここの生産者は全くJAに関係ない人たち。組合員ではあるが、JAには全く関係ない。それから協同青果の方はJAの職員、組合員さんで、今までここに出していた。ところが今はだんだんだんだん愛菜館とかの方に行って、協同青果さんはもう地元の荷が集まらないで困っている状況。
- 委員 そういう面からいって、根本的に減反という40%はもう遊んでしまう。これを何とかここの中で産地形成したり、そういう環境を整えて、そこにIターンができ、森を使ったなにごでき、食農の市民農園ができ、そういうことがこのたびの8次総の中にしっかり入れてほしい。
- 委員 Iターンをする人の、まずその人が生産者なのか趣味人なのか、両方あると思う。生産者として帰ってきたい人、これはもう真剣に農業に取り組まなければいけない。この人も当然誘致したい。ただし、みんながみんなそうではない。都会暮らしが嫌で田舎に帰りたい人はまず趣味人として田舎で暮らしたい。その中で生産にも携わりたい、趣味の一環として。その中である程度もうけもしたり、自分の趣味としてもうけもつくったりしたいというような、趣味の方から生産に入る人もあるだろうし、もう本当に生産に入りたい人もあるだろうし、その2点はある程度分けて考えるというよりは、そういう2種類があるのだなというのを漠然として分けて考えた方がいいのかなというふうに思うが。
- 委員 整理の段階ですから、どっちでもできると思うが、基本はやっぱり産業、農業で考えてみて、人と農地、土地。そして経営がある。議論する場合に、経営というものを抜きにして考えるかどうか。つまりは経営というのは特別なものとして扱い、あと先ほどの田舎だとかいったような環境だとかというものをひっくるめた面的なものととらえる部分と、そういう点からすると、Iターン一つにしても、それは優秀な生産

にかかわる人できっちりやろうとする、そういう仕組みや制度はいっぱい出てきている。どこまでハード部分が、市町村の機能の中でどこまでやれるのか。本来これも国策の中で担い手育成ということで今議論されているところだが、ところがそれだけではだめではないですかということに今、戻っている。ですから、その他大勢の家族農業の分野がウエートが大きい。

地域社会に対する貢献度も食糧供給に対する貢献度も今の段階では非常にウエートが大きい。それを切り捨て御免みたいな形で経営論ばかりで、しかもコスト低減ばかりで担い手論を語ってくると、これ本当で先ほどおっしゃるような耕作放棄地を守れますかというところに戻ってしまうから、家族農業の方々にもということになると、それを今までのように補助金ばらまきで個々ばらばらではそれもいけない。まとまった形である程度は経営的要素を持ってもらおうと。それが集落営農というところまでたどり着いてきている。大きな流れから見ると、今、国策論で語られている視点は間違いはないと思っている。

ただ、現場の方でどこまで共有して、意識を取り組めるところまでなっているかという、高齢化もあり、村の中も、だれもやってくれる人がいない。その中で集落営農を論じててもどうにもならない。ならば農地を集積するところまでならばできる。集落営農そのものの中に、経営を外してしまっ、集落営農の中に2段階に分けて考えていく。そうすると、仲よしグループのような形の中で集落組織でできる分野と、それに対して経営という生産行為をやる人は、担い手の点にある人をどうそこに結びつけるかと。これは地域連携型集落営農というふうに名づけているが、集落ごとに完結しようとしても実は無理がある。ですから、点とその集落の面とをどう結びつけていくか。そういうドッキングさせる役割機能というのは、農協やそれから市町村にあるではないか。その部分は、そんなにお金がかからない。仕組みづくりの問題。あるいは集落のそういう意識のお互いの認識を高めてもらうためのそういう働きかけだとかというようなことで、何か目指す方向が見えてくれば、市町村は市町村なりのできる範囲のものというのを組み立てていけるのではないかなと思ったりもする。

○委員 村の意識がそこまで危機感がない。

○委員 それで今、JAも市町村と一緒にあって、去年から始まった集落営農の中の水田営農の分で、集落営農ビジョンを今度は集落単位にビジョンをつくってもらおうと。そこで話し合いの部分でどうしていくかということが見えてこない限りは、次の応援団としての支援策がとっていけないということで……。

○委員 やっぱり集落単位の面で十分問題を引き出し、それから次なる夢を引き出してくる。集落単位で何とかやろうとする動きでいっぱい県内の中でも特色のある取り組みの部分ありますから、単なる農業だけでなく、いろんな加工をつくったりするようなものもあり、レストランをつくっているところもある。それを押しつけるのではなくて、やっぱりせめて集落単位で動きを活発化させる、ちょっとここにもテーマに

載っておりましたけど、こういった部分から引き出していくようなのも一つの方向かなと思う。

○**山下農林水産部長** 担い手支援係というのをつくって、今これから入っていこうとしているが、やみくもに入ってもいいことないので、まず村でやっぱり10年後どうなるのだろうかということを考えてみてくれということから出発して投げていかないと、本当に自分たちで考えないと思う。

○**委員** 要するにJAも市も、地域が何とかみんな話し合って考えてくださいと。そうすれば支援してあげると。これができるところはいい。むしろそこまで出ないのが多い。その地区の環境からある程度絵をかいて、こういうふうにしたらどうだというようなことを示しせればついてくる。

○**委員** JAの営農交流で、布施の運動公園の前でれんげ米をつくれという提案をした。プランニングまでできた。ところがそれに対してJAは、皆さんが盛り上げられたら、やられるのなら協力しますよと。ところがみんなは何を求めているかといったら、こういうことをやるからついてくるかという言葉が欲しいと、もうここで食い違いがある。

○**委員** 営農者としての志を持って帰ってくるという人は、そうはいないと思う。それよりも気ままに暮らしたい、本物の暮らしがしたい、本物の安全なものが食いたい、うまい水が飲みたい、いい空気が吸いたいなど。そういうステージとしてふるさとに帰りたいという思いがこれからはだんだん強くなってくるし、定年を迎えてまで制度の中にぎちっと縛られるのは嫌。だからそういう気ままな人たちに舞台を提供しますよと。構える方は大変ですよ、それは、いろんなニーズがあるから。

大きく言えば、鳥取市、新市という何か大きなステージがあって、その支配人的な役割を行政はしなければ。どういう生活をお望みですか。星が見たいなら佐治の方に民家で空き家がありますから御紹介しますとか、温泉つきのどこかでんびりしたいなら気高町で、趣味でちょっと土いじりがしたいなら河原町にこういう陶芸家がいって週に何回かは指導のときがあり、民家を再生した集う場所もありますからと、そういう役割が行政ではないかなと。あんまり仕組みをきちっと、ここに建物つくって、こうしてこうしてこうしてというようなことをしたって、恐らくこれから、我々も団塊の世代よりもちょっと上ですけども。

○**委員** 気楽にしたいだけです。

○**委員** 2つの面があるのですよ。要するに今言うように、ここの農業としてどういうふうに生産基盤をつくってやるかということ。

○**委員** 観光には農業、漁業、林業がソフト面としてとっても必要。

○**委員** それは今現在の農業をどう振興させるかという問題とは別個。

○**委員** 鳥取の産業は本当に第1次産業が観光とも結びつく。観光と結びつく要素を持っているのは第1次産業しかない。

- 委員 曲がったキュウリは売れんというのは確かにそうだろう。田舎暮らしをしようかという人間は曲がっていてもいい。
- 委員 自分でつくって、食べるのはいい。ただ、業としてこうして出すときには、初めは売っていたのです。ところがやっぱり皆さんがトレサビの問題出ました。やっぱりいいものから、格好のいいものから売れますよ。そうすると、競争上そういうことになってくるのです。そうするとトレーサビリティ、これは〇〇農場のものだということで信頼感になってきている。
- 委員 今度東京の都心に、渋谷の真ん中にそういうものを扱うスーパーができた。魚も24時間以内にとれたものしか並べない。だから、時には魚が全然並んでいないときもある。それから農産物も信州のだれかさんのつくったものという、こっちの100円市と同じようなものを東京のど真ん中につくった。これからはそういう志向になるだろうと。だから我々の生活の周りには、そういうことを提供しようと思ったら幾らでもできる状況があるのではないかなと思うのですけども……。
- 委員 一番いい例が、大丸とトスクを比較してみることに。大丸の魚売り場はかなり高い。ところがみんな本当に主婦よりもちょっと下の人で、なぜかといったら、2人暮らしや3人暮らし。いいのが1匹あったら、値段はもう要するに500円なら500円で買えたらいいわけだから。だからそういうニーズもあります。恐らくちょっと消費構造も変わってきつつあると思う。
- 委員 にぎわいをつくらないといけない。それでそのためにはどうやるか。せっかく40%から減反している。それから70%は山林。この合併したのが。そうすると何でここらを有機的に結びつけたら、その中にこうあれば、観光とそういうものもやれば、その中に産業は一つの役割を果たすというふうないい構図ができないかなと思う。
- 委員 農家の、集落はそういう趣味人としての都会の人を受け入れる気持ちがあるかどうか。
- 委員 産業としてがちがちに基盤を固めていきたい集落が、趣味人としての人を受け入れる気持ちがあれば、その両立が成り立つ。もう一つは、農業地帯でその消費と生産の結節点として、集落なり農業地帯が働けるというようなことかなと。それで一番重要なのは、農業地帯の農業集落は受け入れる気持ちがあるかどうか。
- 委員 生産構造上から見た場合には、是か非かという論は必要ないと思う。そうではなくて、やっぱり今ある農地をどう生かすかというところがあるわけで、その人はだれであっていい。
- 委員 それが不足しているのかしていないのか、やり手がないから外から導入しなければならないということになれば、これはもう今ですら中国や韓国からでもというふうな話だって起きている。現実に国府町の河合谷大根の場合でも失敗した例があるし、今、東伯で全部ナシ園を、もうなる寸前のところまで5年間は全部育成して、経営が成り立つところになってからいらっしやいという仕組みで、これは大阪からもどこか

らも来ている。

夢を描け、話し合いの金は出しますというようなことまではやったことがある。だから、話し合いをしてもらって酒を飲んで、菓子をつまんでお茶を飲んで語り合った。夢はできた。夢までで終わる。実践までにつながらない。なら何かといたら、今集落、直接支払いのように、もう少し何かお金でつっていきような形、それでも今の直接支払いは、あれがなかったら中山間の奥地の方はだめになった。

とても市の財政であれもこれもというのは限界があるから、結局は国のレベルでの国策の大きな基本策が出てこないとだめだ。

○委員 もっと統計的、科学的な手法で、集落診断制度で全部診断をして、そこである程度アドバイスのできるようなものを引き出して行って、それには集落担当専門官を一人つけるとか。それが農協と市と一緒にあってずっとやっていくとかいうようなことがあって、一つのきっかけづくりがあると結びつきができてくるが、話し合いしろ、これしろということまでの丸投げでは、やっぱり先に進んでいない。

それから、売り先を先に決めて、売り先が何を求めているか、れんげ米なのか有機米なのか、これこれの減農薬でいいのか。ならばそれで幾らで、幾らの量を取引するか、ここまでのものが出てきたら、これだけのもののこれだけの条件つきですよ、皆さんそれにやられる人がありますかと。そしたら私どものところでもやろうということでもとまったらできる。今、学校給食もその道でいきている。学校給食を農協がやれやれと言われるけど、そんなサービスでいつまでも続けられないということで、今回指針を出したのは、価格と品目と期間において条件つきですよ。これとこの品目で、いついつからいつまで供給します、値段はいくらと。これを学校給食の推進協議会に提案をします。その提案をのんでくれられたら随意契約でその部分だけを契約しましょう。ここまでの話を一応持っていくことにしまして、先回も知事と話をしまして、これならいいぞと、これでいってもらえるならいいと。今、いなばの方でも市の方と一緒にあってバレイショから始まって。今度はキャベツもタマネギもやっているでしょ。そういう形を具体的に踏んでいかないと、確かに丸投げではだめだと。

○委員 農家の人の欲を出ることを考えていかなければいけないと思う。

○委員 農林振興地域とか市街化調整区域を市町村合併になった機会にもう一回見直してほしい。

○委員 農地法とかの関連で、株式会社で農業経営にかかわる、それから遊休地を例えば行政が借り上げて、それをまた第三者に貸すというような制度があるか。

○委員 それに適したところだったらそのようにすればいい。

○委員 しゃくし定規にばおんと張ってしまい、それを崩そうとしないわけですよ。だから困っている。

○委員 受け入れ体制ができているかどうかなんていうのはわかるわけもないので、つまりもしそういう制度をつくるうとしたら、その制度に乗っかるという集落は手を挙げ

ていただくとか、何が何でも希望者を全員受け入れなければいけないわけではなくて、例えば市が仲人役になってお見合い制度みたいなことをするとか、それで両者が合意したら、では来てくださいというような、そういう仲介役をしてもいいし、あるいは全国に発信してコンペ制度にしてもいい。私はここでこういった作物をつくりたいとか、で、審査して、では一番いいと思うものを誘致するとか、いろんなやり方がある。ただそこに空き家があるからもう何でも希望者を受け入れというのでは、いろんな集落の性格によってそれこそ摩擦が起きたりというようなこともあるし、そこは受け入れる意思があるということを確認した上で、市が仲介役になるようないろんな制度を考えていけばいいのだろう。

- 委員 健康診断が要る。
- 委員 今の点は既にやっている。
- 委員 県の農業会議までも全部大阪まで出向いて、京阪神にいろんなもうテレビから雑誌から全部に呼びかけて……。
- 委員 でも集まらない？
- 委員 集まっている。こちらの方で全部ニーズも何も聞いて、こちらの方の今度は農家群の方にも結びつけて、いくつかあるのですよ、結びつけた例は。結局はやはり今の農業の持っている、いわゆる、それは生産する方ですよ、お遊びや趣味の段階ではなしですよ。ですから、これだけ厳しい状況の中で、もうからないと生計が成り立ちませんから。
- 委員 そういう裏づけがないと気持ちだけの問題では成立しない。もう具体的になればなるほど。鳥取県のようなところに来て、では冬場は何するのですかということになって、これは河合谷がいい例だった。
- 委員 大根がいいですよ、よしやりましょうというわけで来られた。ところが大根も値段が上がったり下がったりしてもうからない年が出てきた。何で大根の値段が下がるのですか、私どもどうしてくれるのですかと、こういって言われて、それで次に言われたのが、では半年間働いて半年間は何か仕事がないのですか、私たちどうしてくれるのですかと、こう言ってこられたのですよ。雪がある河合谷で一年じゅう農業できるわけにはならないということは初めからわかっている。農業そのものが全部やっぱりわかっているから、来てみて初めてわかって、しかも値段が上がったり下がったりするというようなこと、当然だと思っていることが全部理解されていない。借金を抱えるようになってから初めて問題にする。こういう状況ですから、そこまで全部最初からわかると足踏みされますしね、当然でしょう。
- 委員 ほとんどの集落の今、農業される人は、先祖からの農地をめちゃくちゃにしてはならないし、守らないといけないし、ほかの家に迷惑がかかるから何とかしなければならぬ。何とかしなければならぬというときに赤字経営なのです、60アール、50アール持っておられても、米つくっていても。ですから、給料で穴埋めをして、

総合所得にして還付金もらおうやとやってやっているとありまして、そういう現実論なのですよね。ですから、そこに何をどうくさびを打っていくかということになると、国策以上のものはとても市の力ではできない。

- 委員 本真にいろいろ現場を考えると暗い。それこそ夢がない。けれども鳥取のことを考えると、ソフト面といい、でも何か新しいものが出て考えるではないかというところを、何とか現実論としてどうやるかということを考えてたい。
- 委員 第1次産業と農業振興というのは別ルートで考えないと。だから、ステージとしての田舎暮らしというとらえ方を、やっぱりこれからは新しいとらえ方をして見ていく必要があるのではないかなという気がする。
- 委員 鳥取型の集落営農の考え方を真剣に考えないと、JAとしても今、考えられるならやりましょうでなく、つまりこういう絵がかけるよということが提案できるぐらいをやらないと、それに意思が絡まないと、この産業としての分野はちょっといけない。そのためには診断。山林などの資源を何とか集落営農というものと合わせながら、何かそこを結びつけていく、そこの知恵を何か探すこと。
- 委員 経営論というのは確かに担い手論でまず攻めていかなければならないと思う。ただ、農地対策、土地対策として考えた場合は、これはもうけ論とは別な話の中で、やっぱり集落の面的なところに向かった対応策をとっていかなければいけない、それが集落営農。もう一つは今の地産地消。この地産地消のいろんなふれあい市や産直や、このパワーはすごい。これをもっと掘り起こさないといけないし、そこには身近にまだ学校給食もあり、いろんな分野がある。これはもっと発展的なものがある。
- 委員 地産地消といっても消費に限界があるから、このパワーをさらにとということになると、やっぱり京阪神に持っていかなければならない。もっと都会に行っても通用するものを確立してもう少し力を入れていけば、退職してからでもすぐ参画でき、年をとっても仲間入りできる。こういうものをどう引き出すか、最終的には地域や農村の元気を引き出す源になる。
- 委員 とにかく底辺を広げて、京阪神の流通に乗る。最大公約数的に積み上げていって、そういったものを選んでいく。そういった10年先をにらんだ製品づくりというものを。
- 委員 教育論とか、意識改革論に戻ってくる。弁当を子供が買い物して、材料を求めて自分がつくって自分で詰めてくることから始めた意識改革が注目されている。みずからが動いてみずからがやるということを起こさせない限り、耳から突っ込もうとしても無理。今の地産地消の物づくりをして、店に置いて、自分の名前をつけて置いて、責任感もあって、そのことが大きな渦につながってくる。ここの部分を行政分野も十分目を向けて、そこに力を入れるべきときではないか。
- 山下農林水産部長 食育型の市民農園。確かに食生活を改善しないといけないということとは必要。ただ、市民農園というのはなかなか需要がふえてない。市民に対してまだ

まだ呼びかけが足りてないと思う。

○委員 これから市民農園ももう十坪ではだめ。本当は広い市民農園をつくらないとこれからはもう長続きしない。

○委員 都会の人が農家の、集落の中に入りづらいというのが何かデータに出ていた。

○委員 溶け込めないのですよね。村意識というか。

○委員 廃村みたいなものはないのか、もう。今真っさらになっている。

○委員 ある。

○委員 そういう実態調査もまた、それと、もちろん大きなターゲットは京阪神だがまず市の人間が例えば河原、佐治に足を運んでみる。新しい仲間になった旧町村に足を運ぶきっかけづくりというのは必要がある。佐治に行ったことがない人はいるし、発想が、新市から市街地という人の流れをどうも全体的にイメージしているが、新しい新市の人間が、旧市の人間が新市に行き、その地域をしっかりと確認し資源を見つけ出すということが必要。

○井上スタッフ 行政としての役割だが、農業集落のマネージャーとして、取りまとめを丸投げするのではなくて、マネージャーなり診断者として、行政なりJAなりはかかわっていかねばいけない。

都会人のコーディネーター、都会の方が農村に入ってくる時の仲立ちとして、コーディネーター役として行政やJAがかかわる可能性があるのではないか。

農業農村地帯の今度は場所としての考え方。食育の場として農業農村地帯をもっと考えこれをもっと推進してはどうか。

今度は産業の育成という意味では、国策としてやるのが必要だから、市の仕事としては、国策としてなるように産業育成の仕組みを国策としてなるように国に働きかけをしてほしい。以上がまとめでよいか。

○委員 地元の間が地元を知るというか、同じ市内のよその地域を知るような手だてをして、もっと自分の土地を知る。農林水産業地帯としての鳥取市を知ることがを努力してほしいということ。

○委員 これに漁業が抜ける。漁業が抜けるために本当にちょっとバランスがとれない。漁業の分野で考えるのは、ここで、賀露で魚を揚げだ、網代で魚を揚げと言ったって、漁業の分野で考えられるのは、漁業支援がいかにか大切かという分野ともう一つは観光。

○委員 それは漁業の産業論で論じたら、それは専門家でないとわからない、やっぱり食で結びつけるべき。

○委員 食と観光。

○委員 食育の中での範疇、それは背景論ではやっぱり命の中から生まれてきているもの。そういう面では共通点がある。市民農園にしたって何にしても、食育で地産地消にしたって食育、学校給食も食育。この分野でくくりつけて、共通点をびしっとバックボーンに据えていくべきではないか。林業でも集落の裏の山がやっぱり一つの暮らしの

バックにあるから、そういうものを掘り出したり、魅力のよかった探しをしたりというような形で全部結集すれば、山から田んぼから平地から海のところまでつながっていくものが、この因幡の中ででき上がってくる。

○委員 人材の活用を、ひとつ考えていかないといけない。JAの職員さん、定年前の職員さんもそうだし、豊富な人材。それからやっぱり兼業農家とか、そういうことでサラリーマンの方が60で定年を迎えれば、この人たちの人材、エネルギーというものは本当の意味での活用を考えないといけない。これも大きな柱で入れてほしい。

○委員 では以上6点、最後のを合わせて一応この6点を発表させていただいてよろしいか。

【全 体】

○山川スタッフ 事務局で意見をまとめ、すべての内容について部会員に報告。第3回の部会のときに再度それについての意見いただく旨報告。

第3回の部会については3月31日の木曜日。午後1時半から3時までが部会、3時から4時半まで第2回目の全体会、会場は福祉文化会館の予定である旨報告。

17年度は全体会としては、予算の都合で全体会が2回、部会が4回。3月に行う第3回部会のときに、17年度以降のこういったテーマにするかというようなこと相談したいので、産業振興の観点から御意見をいただきたい旨依頼。

○委員 17年度部会にあわせ懇親会を実施する旨確認。

4. 閉 会